

もの言う牧師のエッセー 第263話 リオ・パラリンピック③ 「感動ポルノ」

2年前に32歳で亡くなったオーストラリア人のステラ・ヤングさんは、骨に難病を持つ障害者だった。15歳の時、地元共同体から両親に、ヤングさんを功績賞に推薦したいと連絡があったが、「ありがたいのですが、大きな間違いがあります。彼女には何の功績もありませんよ」と両親は応じた。障害者を過剰に感動的に描く「感動ポルノ (inspiration porn)」という言葉はヤングさんが命名した。

「本当に特別なことはしていなかった。障害を持って暮らしているだけで立派、というウソが広まっている」と彼女は指摘する。手の無い人が口にペンをくわえ絵を描く姿や、カーボンファイバーの義肢で走る子供。みんな身体能力を最大限に引き出しているだけなのに「感動した」「勇敢だ」とたたえられる。障害者は人間ではなく、障害のない人を感動させる「物」として扱われている、とヤングさんは訴える。リオ・パラリンピックでは、メディアが“障害を乗り越えたストーリーに偏りがち”と指摘された。

「美談はありません」と言い切るのは、2020年東京パラリンピック出場を目指す日本ボッチャ協会の強化指定選手、東大阪市出身の高田信之さん。03年に海で飛び込みに失敗し、首の骨を折り、頸椎損傷で「一生、車椅子生活」と告げられた。だが、涙を流したのはこの日だけ。ボッチャにのめり込み、国内有数の選手になった。「何でもかんでも感動秘話にするのはどうか。僕みたいに落ち込んでない人もいますから」。障害の有無を問わず真の成果で評価する時代がやって来た。聖書は

「いったい誰が、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」

第一コリントへの手紙4章7節、

と戒めているが、実のところ、神を信じたまでは良いが、我々が神によって造られ、彼によって必要な糧をいただいているのみならず、我々を罪から救うためにイエスまでタダでいただいているながら、そのことを忘れ、実は大したこともしていないのに「私はこんなにガンバッテイル」などと自己陶醉に陥いる“感動マスターベーション”状態のクリスチャンが多いのではなかろうか。だが覚えよう。自薦や他薦、苦勞の有無に関わらず、キリストは我々の真の成果をジャッジされることを。

2016-10-19

